残り一日で破滅フラグ全部へし折ります❷

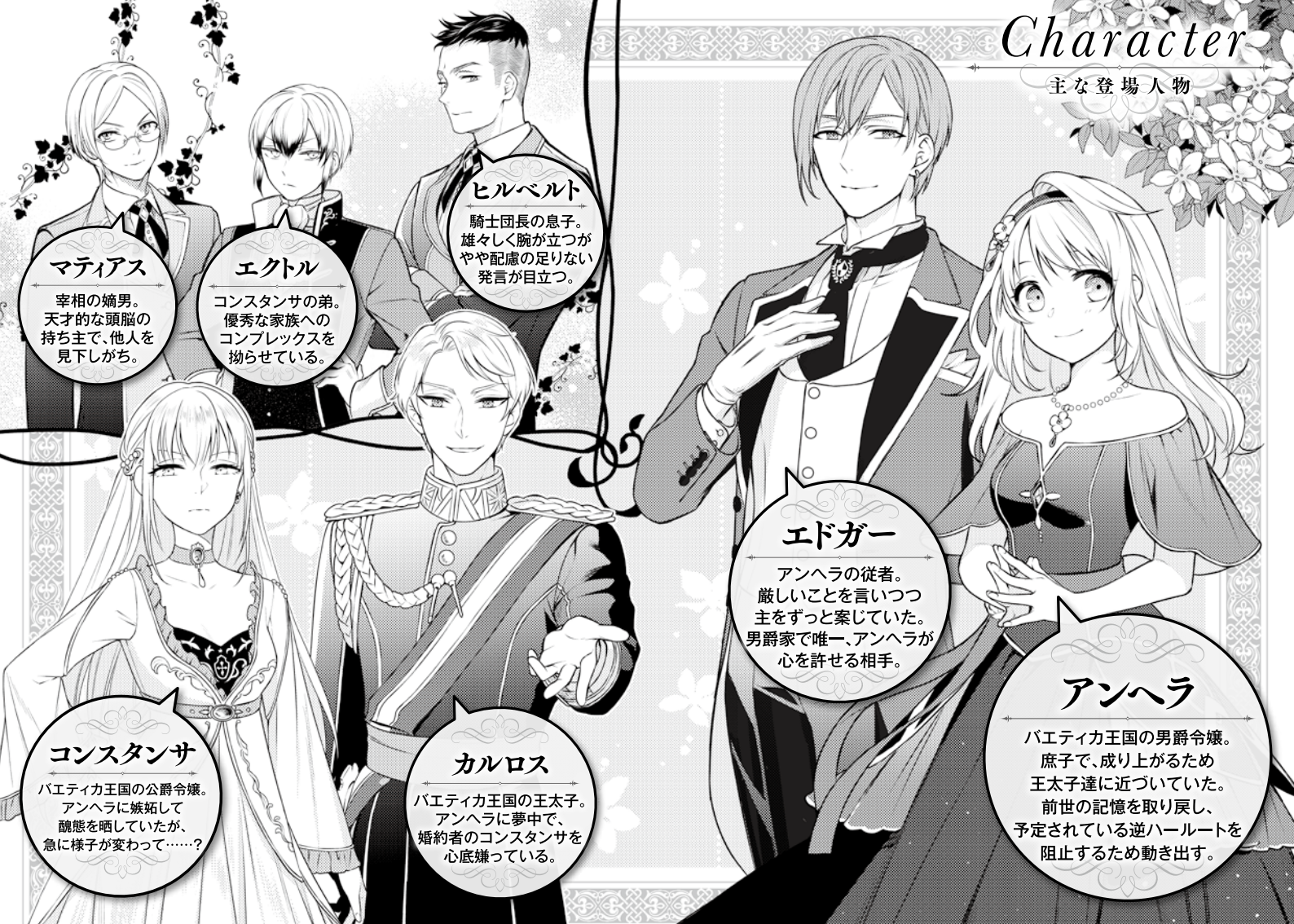
～ざまぁRTA（リアルタイムアタック）記録24Hr.～

福留しゅん
Shun Fukutome

Regina BUNKO

Character

主な登場人物



目次

残り一日で破滅フラグ全部へし折ります２
～ざまぁＲＴＡ（リアルタイムアタック）記録24Ｈｒ．～ 7

書き下ろし番外編
殿方はかく愛する伴侶を語り合う 359

残り一日で破滅フラグ全部へし折ります２

～ざまぁＲＴＡ（リアルタイムアタック）記録24Ｈｒ．～

□当日十七時

「コンスタンサ！　もはやお前の陰湿な嫌がらせの数々は見過ごせん！　よってお前との婚約は破棄する！」

と、皆に聞こえるよう宣言なさっているのは、バエティカ王国の王太子であらせられるカルロス様だ。凛々しくて格好いいお顔は怒りで歪んでいて、目の前のご令嬢を鋭く睨みつけていた。

「……はて、陰湿な嫌がらせ、ですか。何のことだか心当たりがありませんわ」

そう優雅にお辞儀をしながら答えたのは、王太子殿下の婚約者であらせられるコンスタンサ様。誰もが羨む美貌に笑みを張り付け、責められている状況でも優雅さに陰りは一切見られない。

「とぼけるな！　お前がこのアンヘラをいじめていたことは調べがついている！」

カルロス様が腰に手を回して抱き寄せているのは、彼が真実の愛とやらに目覚めた相手とされる男爵令嬢のアンヘラだ。柔らかさと硬さが同居する成長途中な顔立ちと身体つきで、まだ少女らしさを残していた。

……そして、認めたくないのだけれど、この騒ぎの元凶たる男爵令嬢こそ何を隠そう、このわたし本人だったりする。

本当ならこの騒動はもっと悲惨になる予定だった。騎士団長のご子息だったり宰相閣下の嫡男だったりがカルロス様に同調し、コンスタンサ様を糾弾するはずだったけれど、彼らは今カルロス様の傍にはいない。

既に仕込みは終わっている。あとはもうなるがままにしかならない。

ここまできたからには覚悟を決めて乙女ゲームの運命を迎え撃つまでだ。

全てはちょうど一日前に覆ってしまったから。

□前日十七時

前略、天国のお母さん。

もう少しでわたし、ざまぁされちゃいます。

「どうしてこうなったんですか……」

わたしは呆然としながらソファーにもたれかかって天井を見つめるしかなかった。

天井に施された幾何学的な模様を眺めて現実逃避することしばし、こめかみをぐりぐりと押さえてなんとか落ち着きを取り戻す。

まず、わたしの名はアンヘラ。大陸の半島に位置するバエティカ王国のしがない男爵家の娘だ。

それも血縁上は父にあたる男爵が、平民ながら可愛いと評判だったお母さんに手をつけて生まれた不義の子だったりする。

お母さんはわたしを愛してくれた。けれど、男爵に捨てられたお母さんがわたしを育てるためにとっても苦労していたのは、子供のわたしにも分かった。

そんな無理が祟って身体を壊したお母さんは、数年前に神のもとへと召されてしまった。

充分成長していたわたしは働いて一人暮らしするつもりだったけれど、男爵家に引き取られることになった。成長してお母さんに似てきたわたしは政略結婚の駒に使える、と考えた男爵の目に留まったからだ。

わたしは貴族としての生活に興味はなかったし、きらびやかな宝石とか上質な布地の衣服とかにも全く憧れなかった。ましてや子を宿したからってお母さんを捨てたくせに、今更父親面する男の思い通りになんてなりたくなかった。

「それでも……断れるわけないじゃないですか。だって貴族って、自分が正しいって当たり前みたいに思ってますし、断ったらどんな酷い仕打ちを受けてたか……」

理不尽な目に遭いたくなかったのもある。そもそも男爵がわたしに拒否権を与えていたかも怪しい。断れば最後、貧民街に住んでいた当時より劣悪な環境に追い込まれても不思議ではなかった。

だから、わたしは利用することにしたんだ。

わたし個人が幸せを掴むためなら男爵家だって踏み台にしてやる、って。

それからはとっても大変だった。

元平民の娘が礼儀作法をすぐさま会得するなんて無茶な話だ。生きるのに精一杯で教養とは無縁だったもので、男爵夫人には頻繁に怒られた。異母兄妹はおろか使用人からも愛人の娘だと陰口を叩かれるし、もう散々な目にしか遭っていない。

それでも王立学院に通い始める頃にはそれなりに男爵令嬢らしくなれたとは思う。お母さんを馬鹿にされても我慢できる程度には上辺を取り繕えるようになったし。何より知識と経験は無駄にならないし、そこは感謝しよう。

そもそも女として生まれたわたしの成功ってなんだろうか？

この国に根付いた宗教的価値観のせいで女性は家を守るべしと考えられている。女手だって欲しい平民ならまだしも、貴族の令嬢や婦人が当主になったり王宮で文官として召し抱えられたりする例はほとんどない。

貴族社会において女の成功とは、実家のために良家へ嫁ぐことを指すのだから。

「だから学院でも人気のあった男子達に近づいたんですよね、わたし」

貴族として生まれた子息息女が、社交界に加わるに相応しい知識と教養を身につける場として設立された王立学院。一応男爵家の娘になったわたしも通う破目になったから、その学び舎を最大限に利用することにした。

他のご令嬢の非難の目なんて知ったことじゃないし、婚約者がいようとお構いなし

だった。あざとい振る舞いも猫被りも上等。とにかく少しでも男子の気を引こうと一生懸命になった。

そのおかげもあって、複数名の素敵な殿方から好意を寄せてもらえた。

彼らの中にはわたしとの将来を考えてくれる人もいた。わたしと添い遂げられるなら婚約者とは婚約破棄しても良い、とまで言ってくれる方まで現れた。

勿論そんな風に調子に乗るわたしが黙って見過ごされるわけもない。ほどなく他の令嬢達から陰湿な嫌がらせを受けるようになった。

金輪際やんごとなき方々に近寄るなと脅されるのは序の口。ちょっとした失態を大げさに嘲笑われたり、わざとぶつかって転ばされたり、結託して孤立させられたり。茶を頭からかけられたりもしたし、私物を壊されたりもした。

「で、わたしをいじめてくる筆頭が公爵令嬢のコンスタンサ様、と」

コンスタンサ様は王太子カルロス様の婚約者。初めのうちは至らないわたしに寛容だった彼女も、カルロス様の恋心がわたしへ向けられていくにつれてわたしへの苛立ちをつのらせ、意地悪くなっていった。

けれど彼女達は分かっているのかな？　男ってそういった女の妬み、僻みを醜いと受け取ってしまうんだ、って。婚約者にいじめられるわたしを守りたいと思うように

る、って。

そうして婚約者に愛想を尽かしたカルロス様方は、わたしを更に愛するようになっていき、ついにこの間、その想いを告白してくれた。わたしがあえて身分やら立場やらを理由にお断りしたことで、逆に彼らは恋心を白熱させていくのだった。

カルロス様方はいよいよ明日、婚約者へ婚約破棄を言い渡す予定だ。加えてわたしへのいじめに関して婚約者達を糾弾するつもりらしい。いかに自分の伴侶として相応しくないかを皆に知ってもらいたいからだそうだ。

素敵な殿方の愛に包まれて、わたしは幸せになる。

わたしはお母さんのように捨てられたりはしない。

だってわたしは可愛いし愛されている。成功しなきゃおかしいもの。

あとは今宵、カルロス様を寝室に招き入れてわたしを抱かせれば盤石だ。

既成事実さえ作れば、あの輝かしい存在をずっとわたしに繋ぎ止められる。

わたしは素敵な殿方の心を射止めた。

食べ物にも服にも困らない、輝かしい未来を掴んだんだ――！

「なんで……、どうして今日なんですかっ……！」

そんな幸せの絶頂にいたわたしは、突如として絶望のどん底に突き落とされた。

前後の出来事はどうしてだか覚えていない。確かなのは、星が散った感覚に襲われた途端に膨大な情報が目まぐるしく頭の中を駆け巡ったことだけ。それは今までのわたしの価値観、人格……存在の全てを塗りつぶされたという錯覚に陥るほどの衝撃だった。

そうして思い出したのは別人として一生を送った記憶だった。

ここは全く別の世界、もう貴族と庶民の隔たりがなくなった社会。四角い巨大な塔が幾つも連なり、祭でもないのに大勢の人が行き交って、鉄の箱が凄い速度で動き回る。わたしはそんな信じられないぐらい発展した世界で生活していた。

そこでわたしがどんな生活を送っていたかとか、交友関係はどうだったかとかはこの際どうでもいいとして、もっと深刻な事実がわたしの前に突きつけられていた。

「ここ、乙女ゲームの世界じゃないですか、やだー！」

そう、ここは通称『どきエデ2』という乙女ゲームの世界だったんだ！

「この状況はマジでまずいですよね……！」

わたしがベルを鳴らして呼びつけたのは専属の従者。名をエドガーという。

すぐにやってきた彼は、ほれぼれするぐらい礼儀正しい物腰で恭しく一礼した。

そんな彼に向けてわたしは……

「助けてくださいエドガー！　このままじゃわたし、ざまぁされちゃう！」

意味不明な助けを求めたのだった。

□前日十七時半

ヒロインの従者エドガーは、どの媒体の『どきエデ2』にも登場していない。にもかかわらずその端整な顔や身体つきは、王太子や公爵嫡男などが並ぶ攻略対象者達にも負けていなかった。こんなイケメンそっちのけで恋愛に興じるとか贅沢すぎる。

「は？　ざまぁですか？」

そんなエドガーは、わたしの発言に端整な顔が台なしになるほど眉をひそめた。

「お嬢様がおかしいのは以前から分かっていましたが……」

「いやいやいや、わたし正気ですから」

「では夢と現実がごっちゃになりましたか？　今日は早く寝た方がよさそうですね」

「寝ぼけてもいませんって。お願いですから話聞いてください」

容赦ない言葉が胸に突き刺さる錯覚に陥りつつ、わたしは混乱する頭の整理も兼ねて彼に説明した。前世の記憶が蘇ったこと、そしてここは乙女ゲームの世界だってことを。

「『乙女ゲーム』ってなんですか？　聞き慣れない単語ですけど」

「えっと……大まかな世界観と登場人物だけは一緒で、話がそれぞれ違う章で構成されてる恋物語、って言えばいいのかな？」

「平凡な少女が素敵な男相手に恋愛、ねえ。非現実的すぎませんか？」

「空想だからいいんです。辛かったり退屈だったりする現実を忘れるぐらいに甘美な物語に没頭するって、結構贅沢な趣味だと思うんですが」

「で、その妄想が今や現実になりつつあるんでしたっけ？」

「非常にまずいことに」

『どきエデ2』は前作の『どきエデ1』が好評だったから制作された続編だ。

内容は前作と同じく平凡な女の子が素敵な殿方と恋に落ちるってありきたりなもの。恋物語に付き物の障害を攻略対象者と一緒に乗り越え、最後には幸せに結ばれるって話だ。

舞台は前作に引き続き、貴族の子息や息女が集う王立学院。前世の知識で例えるなら高校と大学を合わせた感じか。卒業すれば晴れて大人の仲間入り。そんな空間でヒロインは攻略対象者達と共に過ごすことになる。

『どきエデ2』の攻略対象者は五人。これにアペンド版とかファンディスクでの追加

キャラクターを含めると総勢八人と付き合えるって記憶している。この国の王太子殿下をはじめとする、普通じゃあ絶対に関わり合わない錚々たる面々だ。

「んで、男爵令嬢にすぎないお嬢様は一体どんな役柄なんです？」

「今更それ聞きます？　こう悩んでるのは、わたしがヒロインだからですって」

「ですよねえ。お嬢様の周りって男だらけですし。本来の『どきエデ2』のヒロインもお嬢様みたいな男たらしなんです？」

「違います。ヒロインには個性なんてありません。媒体によってバラバラなんです」

前作と決定的に異なるのは主人公に個性がない点だ。

前作はいい子ちゃんながら天然かつ少しミステリアスなヒロインだったけれど、なんと今作はゲーム開始前の性格診断の結果、一人称まで変わるほど個性がない徹底ぶりだった。

おかげで漫画版とかノベル版、アニメ版で全く違った主人公像になっている。容姿や名前すら不安定だったから百面相ヒロインだなんて言われていたっけ。かろうじて設定されてたのは生い立ちや境遇ぐらいか。

「じゃあ王太子殿下方がお嬢様に惚れたのはお嬢様が主人公だから、とでも？　あんだけ立派だった王太子殿下方がお嬢様にころっとやられちゃったのは、今でも信じられな

いんですけどね」

「間違ってないけれど端折りすぎですって」

学院生活を振り返ると、これまでの展開は確かにわたしに都合が良すぎた。わたしの行く先々で王太子殿下方とお会いするし、何を言っても何をしても彼らからの好感度が上がっていくばかりだった。こんなに好かれていいんだろうか、とわたし自身が困惑するぐらいに。

困惑が恐怖へと変わったのは、わたしには何故か彼らが何を思い、何を悩んでいるかが分かる、って自覚した辺りからだ。攻略対象者達の悩みの相談に乗って、他愛のない助言をし、さり気なく寄り添う。まるでそれらの行為が彼らの心を掴むんだって知っているかのように。

「今思い返せば……わたしはカルロス様方の設定を頭の片隅で覚えてて、無意識のうちに行動していたのかもしれないです」

「本人達からすれば、お嬢様は自分のことを理解してくれる相手なんでしょうけど、実際のところお嬢様は登場人物の趣味とか嗜好とかが書かれた資料集とにらめっこしてただけ、ってわけですか」

「更に言えば、どんな言動でわたしに対する相手の好感度が上がるかも分かるんですよ。

たとえ何百回やり直したってわたしはカルロス様の心を射止められます」
「そう考えると確かに恐ろしいですね……」
フラグ管理さえできていれば攻略はまず失敗しない。ヒロイン……いえ、わたしはカルロス様方の心ではなく好感度って数値しか見ていなかったんだ。
ゲームならまだしも、果たして現実世界でそれを恋愛と呼べるのかな……？
「恋愛小説だったら俺も読んだことありますけど、普通、相手の男って一人ですよね」
「普通は、ですけど。複数人と付き合ってたら話の軸がぶれちゃいますし」
「んじゃあ現状って何なんです？　お嬢様が射止めた男は王太子殿下だけじゃないですよね」
「……多分、『ファンディスク』で実装された逆ハーレムルートに入ってるんじゃないですか？」
「はーれむ……？　聞き慣れない単語ですけど、何なんですか？」
「ああ、それはですね……」
更に頭が痛いのは、わたしは現在、ほとんどの攻略対象者に唾をつけた逆ハーレムルートを攻略中らしいのだ。攻略対象者達が悉くヒロインの毒牙に……もとい、恋に落ちているのがその証拠だ。

そりゃあ学院内でも人気の魅力ある人達に好かれるのはとっても嬉しい。ちやほやされるのは至福でしかない。最後に誰を選んでも、きっと他の人達とも良い交流を続けていけるに違いなかった。
でも、大勢の素敵な殿方に愛されるなんて最高、だなんてもう、とても思えない。
「ねえエドガー。はっきり言ってほしいんですけど、わたしってカルロス様と添い遂げられると思います？」
「添い遂げるだけなら可能じゃないですか？　王太子殿下は優秀ですしお嬢様も要領良いし、逆境もはね除けちまうでしょうね」
「……じゃあ、王太子殿下の伴侶としてわたしが王太子妃になるのは？」
「言ってほしそうだから言いますけど、無理でしょう。女王陛下がそんな王家の品格を貶める愚行を許すとは思えません」
「ですよねー。愛があればどんな困難だって乗り越えられる、って言っても限度がありますし。わたしに国母は絶対に務まりませんって」
「あのコンスタンサ様ですら幼少期から厳しい教育を受けたぐらいですしね。お嬢様だったらそんな英才教育は三秒で音を上げるんじゃないですか？」
乙女ゲームみたいに素敵な王子様と一緒になって末永く幸せに暮らしましたとさ、と

はいかない。カルロス様と結ばれたら王太子妃、そして未来の王妃として政務に公務、責任や重圧と共に歩まなきゃいけない。輝かしい未来ばかりじゃないんだ。

それは騎士団長子息のヒルベルト様や、宰相閣下の嫡男マティアス様と添い遂げたって同じ。彼らを支えられる力量がわたしにあるとは思えない。愛に溺れた代償として立場に見合う苦労が付きまとうでしょうね。

「そもそもこの国を将来背負っていく人達を悉く虜にしたわたしって、かなりヤバいんじゃ……」

「ヤバいですね。俺が王様だったらそんな人たらしの魔女は真っ先に暗殺します」

大体、夢のような逆ハーレムがこれからも続くって本気で思っているの？

無理でしょう。いつか絶対に破綻するって断言する。

男爵令嬢風情が男を囲ってどうするの？　世間が許すとでも？

そもそも、彼らの愛は本当に長続きするの？

乙女ゲーム以外の情報がないんだから、この先は彼らへの理解度は減る一方。彼らは自分を分かってくれるからわたしに心惹かれたのに、その利点がなくなれば残るのは何の取り柄もない平凡な小娘だけ。そんなわたしが愛し続けられるとでも？

あり得ない。すぐ破滅するのが目に見えている。

「……と、いうわけで、今わたしは崖っぷちに立たされているんです」

エドガーは意外にも、胡散臭い説明を茶化さず真面目に聞いてくれた。途中途中でわたしが上手く説明できなかったら質問をして明確にし、メモ書きまでする。

そんな真剣さにわたしは心打たれた。

「信じてくれますか？　自分で言うのもなんですけど、こんなのとっても馬鹿げてますよね。物語の中の世界だって言ってるようなものですし」

「そりゃあ、お嬢様が王太子殿下方を魅了していなかったら良くできた作り話って思ったでしょうけどね。お嬢様の言う逆ハーレムとやらを目の当たりにしたら信じるしかないでしょう」

「ありがとう、エドガー」

「……っ」

わたしが顔をほころばせると、何故かエドガーはわたしから目をそらした。不思議に思っていたら彼はすぐに元の顔つきに戻してわたしへ向いた。

「それで、お嬢様はこれからどうしたいんですか？」

「玉の輿は諦めるしかないです。得るものに対して代償が大きすぎますから」

だから、どうか助けてほしい。

攻略対象者でもモブキャラでもない、『どきエデ2』に縛られない貴方に。
深々と頭を下げると、机についたわたしの手が優しく握られた。エドガーの手は温かくて大きくて、とても安心できた。
顔を上げて目に入ったのは、今までにないほど素敵な微笑(ほほえ)みを浮かべる彼だった。
「分かりました。俺で良ければ力になります」
「……本当に？」
「本当です」
「本当の本当に？」
「本当の本当にです。信じてくださいよ」
「……頼りにしちゃいますね」
わたしは嬉しくなってしまった。
勿論(もちろん)これはほんの第一歩にすぎない。安心なんてできやしない。
それでも今のわたしには味方がいてくれるのが頼もしくてたまらないんだ。

□前日十八時

「んで、逆ハーレムを止めるって言ってもどうするんですか？　王太子殿下方が王立学院を卒業されるのは明日ですよ」
「問題はそこなんですよ。このままだと明日の晴れ舞台でカルロス様はコンスタンサ様に婚約破棄を言い渡すはずなんです」
「婚約破棄……！　王太子殿下のご卒業だけあって国中の有力貴族はおろか、女王陛下も参加されますし、近隣諸国からの来賓(らいひん)もいらっしゃるんじゃなかったでしたっけ？その中でそんな馬鹿な真似、普通しますか？」
「正義は自分にある、と舞い上がったカルロス様でしたらやりかねません」
仲間になったエドガーと作戦会議を続ける。状況整理は終わったので次は現状打破の模索(もさく)だ。
『どきエデ2』最大の見どころはなんと言っても断罪劇にある。これまでヒロインに好き勝手やってきた悪役令嬢が裁かれる場面は爽快(そうかい)感抜群。愛を誓った攻略対象者がヒロインを虐(しいた)げた罪で婚約破棄を言い渡し、皆の前でヒロインとの愛を公言する展開だ。
悪役令嬢達がわたしをいじめたのは紛れもない事実だから、実を言うと婚約破棄を阻止する気はあまりない。けれど、その先まで進められるのは困る。

「婚約破棄までならいいんですけど、カルロス様がわたしと添い遂げるって公言した瞬間、もうお終いです」

男爵令嬢でしかないわたしはやんごとなき身分の方からの求婚を絶対に断れやしない。そうなったら詰みだ。

「学院は平等を謳ってますし、嫌だって言えばいいじゃないですか。どうせ今までだってそれを逆手に取って遠慮なくベタベタしてたんですし」

「うぐっ、最悪はそうするしかないんでしょうけど。でも、いざその場面になったらわたし個人の思いが押し通せるような雰囲気じゃない気がします」

「まあ、十中八九、旦那様方は押せ押せでしょうね」

父である男爵はわたしが男爵家の娘として名家に嫁ぐことを望んでいる。カルロス様でなくても攻略対象者は皆、男爵家にとっては良縁。誰かがわたしを伴侶にすると言ったが最後、わたしの意思なんてお構いなしに賛同するに違いない。

攻略対象者のご両親が、婚約者を捨てて馬の骨を選んだ我が子の醜態を恥じて勘当を言い渡せば幸いなんだけれど、『どきエデ2』の描写からすると期待薄だ。作中だと女王陛下をはじめ、ご両親達の誰も非常識な婚姻を咎めないんだもの。

「ですから、そもそもそんな状況にならないようにするのが最善策だと思います」

「どうやって？　ズル休みでもしますか？　明日の行事は学院の生徒全員参加だったって記憶してますけど」

「そんなの父が許すわけないですって。仮病は通用しないでしょうし、逃げたって捕まって折檻されるだけです。だから、攻略対象者方にわたしを選ぶって言わせない必要があるんです」

「無理じゃないですか？　彼ら、お嬢様にぞっこん惚れ込んでますし」

既に逆ハーレムルート攻略完了間近なだけあって、各攻略対象者のわたしへの好感度はかなり高い。嫌われるような真似を今更したからって何かあったのかと心配されるのが関の山だ。

「『断罪イベント』でしたっけ？　それ自体を失敗させるのはどうですか？　コンスタンサ様方に返り討ちに遭う、みたいな」

「……危険が大きすぎます。だってコンスタンサ様方から見たらわたしって王太子を誘惑した悪女ですよ。厳格な修道院行きならまだマシで、不敬だとか国家転覆を図ったとかで処刑されたっておかしくないですよね」

「王太子殿下方に明日は欠席していただく、とかは？」

「どうやって？　病気になってもらうよう祈るぐらいしか思い浮かびませんけど」

「んじゃあ王太子殿下方を説得して明日の断罪を思い留まってもらう、とかは？」
「……やっぱり誠心誠意を込めてお願いするしかないですよね」
攻略対象者方がわたしに惚れているのを利用して、婚約破棄騒動を思い留まってもらうよう説得するのが一番現実的か。それも明日の夕方から執り行われる宴までに。どう考えても相当厳しいと言わざるを得ない。
「ところで、どうしてそんな方針にするって決めたんですか？」
悩むわたしの顔にエドガーは真剣な眼差しを送ってきた。わたしが何か粗相をしたり大それた真似をしたりした時にそんな顔をして叱ってくれたけれど、目の前の面持ちはこれまでのどんな時よりも真剣だ。
「王太子殿下方は真実の愛があればどんな苦難だって乗り越えられるって仰ってるみたいですね。それが信じられなくなったんですか？」
「だって、わたしは半分平民の血が流れてるんですよ。どう考えたって恐れ多いじゃないですか……」
「つまり博打に乗るだけの見返りが望めないから諦める、と？　王太子殿下方を愛していたんではないんですか？」
「愛……？　あんなのを愛、だなんて言えませんよ……」

勿論カルロス様方は今でも好きだ。
けれど、富と家柄と名声を含めて彼らに魅力を感じる、って総合的な意味が強い。
彼ら個人に抱く想いは憧れとか尊敬の念ぐらいで、素敵と思えても恋とは違う。
なんというか……心満たされる、溺れるような熱い愛じゃなかった。
「今更だけどわたし、酷い女ですよね」
人格、地位、財産、容姿。それらを踏まえて打算で近づいて誘惑した。
自分の成功のためにわたしは彼らの人生を滅茶苦茶にしたんだ。
「弄びましたって謝るしかないです。今ならまだ間に合うって信じるしか……」
「そうですか。それは良かった」
エドガーはどうしてか満足げに顔をほころばせた。そして混乱するわたしへ拍手を送ってきた。
「いやあ、崖っぷちでなんとか踏み留まりましたね。このまま飛び下りたらどうしようと思ってましたから」
「エドガー、貴方、わたしがこのままカルロス様か他の方と添い遂げたら大変な目に遭うって思ってたんですか？」
「ええ。ですから前から諌めていたでしょう。聞かずに王太子殿下方に傾倒していった

のはお嬢様の方ですって」
「うぐ、確かにそうですけれど……」
言われて振り返ると、エドガーは事あるごとにわたしへ苦言を呈していた。婚約者のいる殿方に軽々しく近づくな、とか、王家や有力貴族を敵に回すから馬鹿な真似は控えるべきだ、とか。
わたしは危険を承知で賭けに出ていたのでうるさいとしか思わなかったし、当のカルロス様方は言いたい奴には言わせておけばいいと彼を窘めた。
エドガーの忠告を聞き入れる者はいなかったんだ。
わたしとカルロス様方の関係が深まるにつれてエドガーの忠告は少なくなっていったっけ。その時はエドガーにも分かってもらえた、もしくは諦めたかと思っていたけれど、今の言い様だとわたしに見切りをつけ始めてた、と受け止めるべきか。
わたしとエドガーの関係も、いつの間にか崖っぷちに立たされていたのか。
「いいでしょう。王太子殿下方との関係を清算するとして、具体的には明日学院でそれぞれにお願いするんですか？」
「それだと遅いかもしれません。まだ皆さん起きてる時間帯ですし、今すぐにでも伺ってお願いしないと」

「……随分と大胆ですね。まあ、それぐらい行動力がないと婚約者のいる王太子殿下に近寄れないんでしょうけど」
『どきエデ２』での行動からすると、各攻略対象者は今日お屋敷に滞在しているはず。男爵令嬢風情のわたしがどうやってお屋敷にいる彼らと接触するかはこれから考えるとして、全員にお願いするとなると日付を跨いじゃうかもしれない。
それにしても……何か忘れているような気がする。
『どきエデ２』では、断罪イベントの前日は攻略した殿方から明日何をするかの決意を聞かされ、同時に想いを改めて告白され、ヒロインもそれに答えていたと記憶しているんだけれど……
「し、失礼します、アンヘラお嬢様！」
記憶を辿っていたら、突然男爵家のメイドがわたしの部屋にやってきた。あまりに品を欠く有様に少し怒りが湧いたものの、どうもそんな気が回らないぐらい焦っているようだった。
「なんでしょうか？」
「その……お客様がお見えになられています」
「客人？　そんな予定は入っていなかったと思うんですけど……。それで、どなたなん

ですか？」
「それが……」
「それが？」
「王太子殿下であらせられます……！」
わたしは思わずエドガーと顔を見合わせた。
いやぁエドガー、そんな責めるような眼差しでわたしを見ないで。
「お嬢様……まだ婚約者がいらっしゃる王太子殿下を家に招き入れるなんて、何を約束してくれちゃってるんですか？」
「し、知りません！　本当なんです、信じてください！」
「とても信じられないんですけど？　無意識のうちに誘ったりしてないですか？」
「してません！　そんなはしたない真似なんて――」
はしたない、真似？
「あ、あぁああっ～～っ!!」
わたしは叫んだ。思いっきり叫んでしまった。
「思い出しました！　そうです、すっかり忘れちゃってましたよ！」
なんでこんな重大なイベント忘れたんですか、わたしの馬鹿馬鹿馬鹿！

まずい、非常にまずい。『乙女ゲーム』だとファンへのご褒美イベントだったこの展開、今のわたしにとっては破滅への片道切符に思えてならない。このイベントを消化したら最後、取り返しがつかなくなっちゃう。
「今晩、『真夜中デートイベント』と『初夜イベント』があるんでした……」
その時、わたしはエドガーがどんな表情を浮かべていたか、怖くて見られなかった。

□前日十八時半

『真夜中デートイベント』と『初夜イベント』は、攻略対象者からの好感度を最高値近くまで上げて初めて発生する。内容としては満天の星の下ロマンチックなデートをして、盛り上がったところで攻略対象者が手配したホテルで一夜を共にする、みたいな。
いやいやいや、いくら愛し合っているからって攻略対象者はほとんどが婚約者持ち。心が離れていても関係はまだ切れてないんだから浮気でしょう。
ご都合主義満載な『乙女ゲーム』内ならまだしも、現実世界でばれたら最後、社会的に死ぬ。

（そんなのは断固阻止の一択よね）

カルロス様には丁重にお帰りいただくしかない。

「お待たせしちゃいました」

「いや、そんなに待っていない」

客間にいたカルロス様はなんと護衛すらつけていなかった。

『どきエデ2』の描写通りだし、デート後の展開を考えてのお忍びなのを差し引いても、あまりに無謀すぎる。昨日までならお邪魔虫がいなくて幸いだとか思ってたけれど、今は国の行く末が心配になってくる。

対するわたしは後ろにエドガーを控えさせている。カルロス様は不満そうに、直立したまま待機する彼を睨んでからわたしへと向き直った。顎でしゃくって退室を命じるよう促されたので、わたしは顔を横に振って拒絶した。

「カルロス様はまだ婚約者がいらっしゃいますよね。なのに男女が部屋で二人きりになるなんて、後日知られたらまずいと思います」

「どうせ明日にはコンスタンサの奴とは縁を切る。気にすることはない」

「これ以上、他の方から陰口を叩かれたくないんです。どうかわたしのためだと思って」

「……アンヘラがそこまで言うなら仕方がない」

それからカルロス様はエドガーを意識の外に追いやったようで、わたしだけを見つめて他愛ない話、例えばこれまでの学院での生活や楽しい思い出で盛り上がった。

屋敷のメイドがお茶と菓子を持ってくる。カルロス様を前にしてとても緊張した様子だったのでテーブルの上に置くようお願いし、わたしがカップに注ぎ入れた。王族からすれば雑草同然の安い茶葉を使っているのに、彼は美味しそうに口をつける。

「とうとう学院生活も明日で終わりだ。これまでは比較的自由を謳歌できていたが、これからはそうはいくまい」

「はい。カルロス様は王太子殿下として、わたしはただの男爵令嬢として。それぞれの道を歩むことになるんですね」

「冷たいことを言うな。私はコンスタンサとの婚約を破棄した後、お前との婚約を発表するつもりだ。そうすれば私達が歩んでいく道は一つになる」

「前から言ってますけど、わたしとカルロス様では住む世界が違いすぎます」

これまでは殿方を振り向かせようと謙遜、遠慮しているように見せるだけの台詞だったけれど、今度はそのままの意味だ。

だって相応しくないとか身分が釣り合わないとか以前に面倒くさ……もとい、苦労が

絶えなくなる不相応な地位は望みたくないもの。

けれど、カルロス様はそんなわたしの様子をいつものように不安で怯えているだけと受け止めたらしく、こちらを安心させるみたいにはにかんできた。それから彼は手を伸ばして……すぐに引っ込めた。膝の上に乗せていたわたしの手を握ろうとしたけれど、ちょっと距離が遠かった、のかな。

「大丈夫だ、問題ない。初めから完璧な令嬢なんて存在しない。王宮の教育係は優秀だから、きっとアンヘラは素晴らしい妃になるさ」

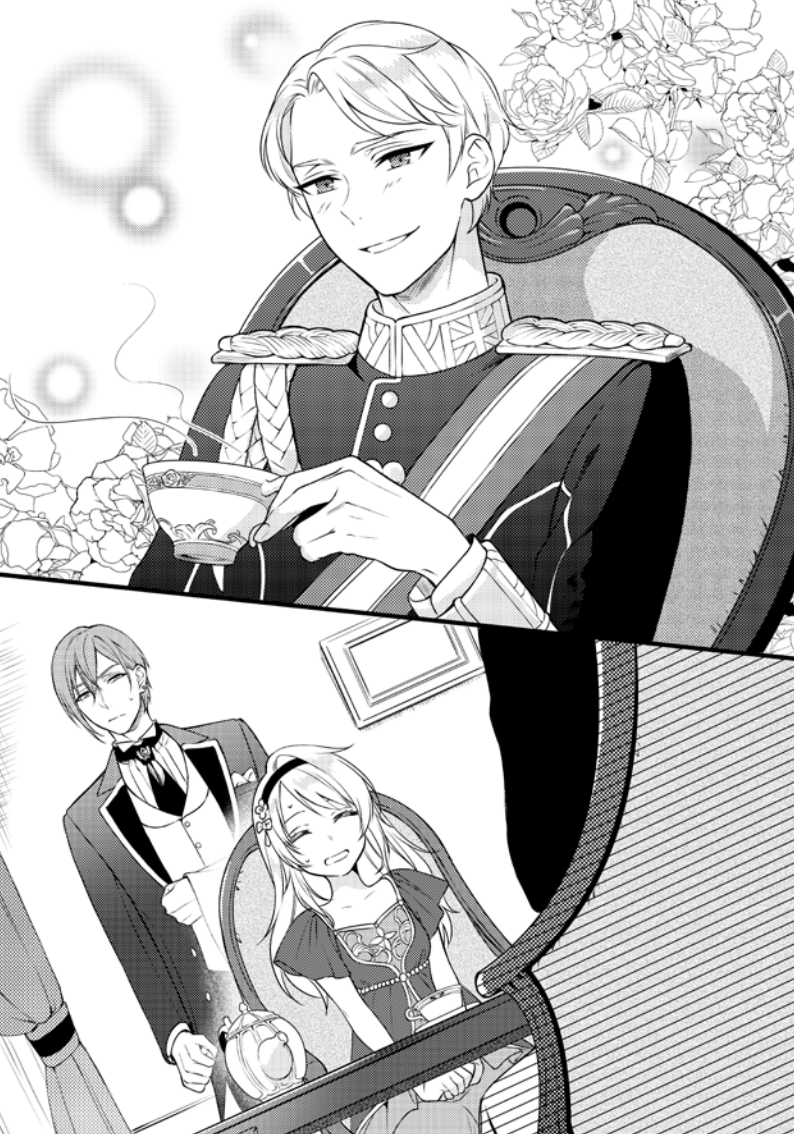
「男爵家の娘が王妃を務めた例は今までなかったと記憶してますけど……」

「前例がないなら私達が作ればいい。身分にもしがらみにも囚われない、真実の愛を貫いた男女として歴史に名を刻もう」

「でしたら、せめてコンスタンサ様が言ってたみたいに、まずはあの方と結婚して、わたしを側室とか愛妾にでもすればいいんじゃないですか？」

「……コンスタンサめ。よくもアンヘラにこんな戯言を刷り込んでくれたな」

そう仕向けたわたしが言うのもなんだけれど、今のカルロス様はわたしへの恋心を最優先にしている。慣例やしきたりも二の次。いかにしてわたしを妃に迎え入れるための正当性を作るか、に尽力している始末だ。



まだ嫉妬と憎悪に支配されていなかった頃のコンスタンサ様は、カルロス様との愛を諦めてわたしとカルロス様が結ばれても良い、ただし未来の王太子妃の座を明け渡すわけにはいかない、と仰っていた。コンスタンサ様は王国へ及ぼす影響を踏まえて最大限の譲歩をしたんだと思う。

そんな彼女にカルロス様が王太子として突き返した答えは、「冗談じゃない」だった。カルロス様からしたら王太子妃の座に執着する強欲な女にしか映らなかったんでしょうね。

「私はコンスタンサを愛していない。むしろあのような心が醜い女の顔を見るだけで苛立ってくる……！　百歩譲ってアンヘラを王太子妃にできなくても、奴との関係はもう終わらせるつもりだ。それはこれまでも何度も言っているだろう」

「でも、やっぱり心配になってきて……」

「それは奴がアンヘラを脅したせいだ。大丈夫、何があっても私が守るから」

「カルロス様……」

頼もしいカルロス様に思わず胸キュンしてしまった自分を、心の中で馬鹿馬鹿と罵った。

愛で全てを乗り越える、だなんてあまりにも夢物語。そうやって一時の感情に流され

た結果、茨の道を突き進むなんてまっぴらごめんだ。

「思い留まってくれませんか？　今からでも遅くありません。誠心誠意話し合えばきっとコンスタンサ様も納得してくれます」

「いくらアンヘラにお願いされてもこれだけは譲れない。どうか分かってくれ」

「でも……」

「くどい！　……やはりコンスタンサはアンヘラに悪い影響しか与えないな」

わたしが何を言ってもカルロス様の決意は揺るがなかった。なおも踏み込もうとしたらしつこいと思われてしまったようだ。そして激怒の要因すらコンスタンサ様に責任転換する始末だった。

「……分かりました。カルロス様の望むがままに」

望み薄とは初めから考えてたけれど、説得は無理みたいだ。

「ところでカルロス様。それで、こんな遅くにどうしたんですか？」

「ふと夜空を見上げたら満天の星が美しくてね。それに月がとても綺麗だった。せっかくだからアンヘラと一緒に眺めたいな、と思ってね」

これ以上は無駄だと諦めたわたしは、既に分かっている来訪目的を聞いた。返ってきた答えもやっぱり『乙女ゲーム』通りデートの誘いだった。

「それはつまり……逢瀬のお誘いですか？」
「ああ。大丈夫、誰にも見られない場所に行ってから楽しもう」
優しい声、眩しいぐらいの笑顔で、とても魅力的だ。こんな感じで星空輝く空の下で迫られたら絶対に断れっこない。
「あの、申し訳ないんですけどこの後用事がありまして。また機会に恵まれたら、でいいですか？」
「用事……？　こんな遅くにか？」
だから断るなら今しかない、とわたしは思いっきり頭を下げて切り出した。
視線も下げていたのでカルロス様の顔は見られないけれど、声が低くなったから機嫌を損ねたのは察せられた。
「私達はもう卒業を控えている身。授業で与えられた課題もないだろう」
「勉強じゃなくて、今までお世話になった方に挨拶へ行こうかな、って」
「それは今晩しなければいけないのか？　明日で問題ないだろう」
「今からじゃなきゃ駄目なんです。ごめんなさい、どうか分かってください」
しばらくの間、部屋の中に静寂が満ちる。
わたしは恐ろしくて顔を上げられず、なのに無言の圧力が襲ってきてとても怖い。自

分勝手な考えだけど、コンスタンサ様に向けられていた憎しみがわたしにも向けられないかって戦々恐々だ。
「まさかヒルベルト達に会いに行くわけじゃないだろうな？」
「そんなんじゃないです。カルロス様が考えてらっしゃるような真似はしません」
「……ならいい。アイツら、表では身を引くとか言っていたが、まだアンヘラのことを諦めきれていないからな。私が見ていない裏で出し抜こうとしているかもしれん」
そう言えば逆ハーレムルート攻略中なんだっけ。王太子ルートがベースだから最終的には王太子と結ばれるんだけど、他の攻略対象者とも親密な関係を続けていくことになるんだった。こんなご都合主義がまかり通るのはさすがファンディスク実装のシナリオだけのことはある。
ただ、攻略対象者の皆がヒロインを愛でる日常の裏側では自分こそがヒロインの相手に相応しいって全員が内心思っていた、なんて衝撃の真実があったりする。誰も悲しまない夢みたいなルートだったのに……そんなの知りたくなかったかも。
「信じていいんだな？」
「わたしよりもどうかご友人を信じてあげてください。これから一緒に国を支えていく、未来の側近でもあるんですよ」

少しの間、静寂が部屋を支配する。カルロス様は真摯にわたしを見つめてきて、わたしもまた真剣な眼差しを返す。

折れたのはカルロス様の方で、彼は軽くため息を漏らした。そんな何気ない仕草でも妙に色気があるのはさすが乙女ゲームの攻略対象者といったところか。

「分かった。私はアンヘラを信じよう」

「ありがとうございます」

わたしは深々とお辞儀した。

わたしを信じる、と言った辺り、親友だったはずの他攻略対象者を信じきれていないようだ。この問題は相当根深そうだけれど、逆ハーレムルート阻止に比べれば棚上げしていい些事だ。

「本当に王太子殿下の誘いを断っちゃいましたよ、このお嬢様。俺、超びっくりなんですけど」

帰っていくカルロス様をお見送りして、彼を乗せた馬車が見えなくなった直後、エドガーがとんでもないことを言い出した。彼ったらどうしてか目を丸くしてわたしをじっと見つめてきたのだ。

「えっ？　もしかして疑ってたんですか？」

「そりゃそうですよ。やんごとなき方々を誑かした魔性の男爵令嬢が突如心を入れ替えた、だなんて早々信じられませんって」

「酷いです。さっきは信じるって言ってくれたのに」

「でもまあ、お嬢様が本気なのはよく分かりましたよ。おかげで王太子殿下、飼い主に捨てられた家猫みたいにしょげてましたよ」

「え、そうでしたか？」

不思議だ。エドガーとは何の気兼ねなく軽口を叩き合える。

平民だった頃は当たり前だったのに、貴族令嬢になった今は身分に縛られて付き合わなきゃいけない。でも主と従者というより友達のように感じられる。

ヒロインの傍にこんな従者がいたら、間違いなく攻略対象者になっていたでしょうに。

『どきエデ２』にもいなかった、けれど心許せる存在。

今更だけど、わたしはエドガーが一体何者なのか、妙に気になった。

□前日十九時

「いよいよだな！　ついに儂らも王家の外戚になるのか！」
「そうね！　もしかしたら爵位も上がっちゃうかも……！」
「いい女、旨い酒、よりどりみどりだろうな！」
「ねえねえ、王家の外戚になったらすっごく豪華な宝石とか買ってもらえるかな？」
晩餐にて、父の男爵と義母の男爵夫人は待ち受ける輝かしい未来に思いを馳せていた。
そして義理の兄や妹のノエミもこれまでは無縁だった贅沢が叶うと好き放題言っている。
欲望にまみれていてとっても素敵。勿論、皮肉だけど。ただここまで俗物だといっそ清々しさすら感じるんだから不思議なものだ。
「でかしたぞアンヘラ。よくぞ王太子殿下の心を掴んできた！」
「これもわたくしの教育の賜物ですわ。汚らわしい小娘をここまでに育て上げたんですから」
「はっ。単に母親と同じで色仕掛けが得意だっただけだろ」

「お義姉さま。優しいお義姉さまは勿論このあたしをこれからも引き立ててくれるわよね？」
男爵家でのわたしはあくまで政略結婚の駒。虐げられてこそいないけれど、所詮は愛人ですらない下民との間にもうけた娘。使用人に毛の生えた程度の扱いだったのに、彼らはわたしがカルロス様に見初められた途端に手のひらを返してきた。
実の父親から満面の笑みで褒められても嬉しくない。むしろ気持ち悪い。
自画自賛する義理の母には嫌悪感が湧く。手柄を横取りされた気分だ。
傲慢な兄や強欲な妹は相変わらずでむしろ安心した。彼らはこうでなければ。
「はい、お父様。ありがとうございます、お義母様。そんなわたしを迎え入れてくれて感謝してます、お義兄様。勿論ですよ、ノエミ」
そんな本心は隠し、わたしは微笑みを顔に張り付けて軽く頭を下げた。
男爵はわたしに誰でもいいから由緒正しい家柄のご子息を誑し込んでこいと命令してきて、男爵夫人は虐待にも近い躾を受けたし、義兄や義妹には召使いのようにこき使われた。
残念ながらわたしには彼らへの愛情なんてこれっぽっちもない。
「ところで先程、王太子殿下が訪ねてきたそうだな。一体どんな用事だったんだ？」

質問を投げかけてきた男爵に目ざとい、と心の中で悪態をついた。
「いえ、明日のことでちょっとお話ししただけです」
「……本当か？　お迎えした時は殿下の心が躍っていたように見えたぞ」
「大げさですよ。殿下はまだ正式な婚約者がいらっしゃる身、節度は弁えています」
カルロス様のお誘いを断ったとバレたら最後、男爵は間違いなくわたしを責めてくる。どうしてその身体で誑し込まなかった、とか不敬な不満を平気で口にしたに違いない。
「心配しなくても、カルロス様のお心の中にコンスタンサ様はおりません」
「ん、まあ、そうだな。あと少しの辛抱なのだから急ぐ必要はないか」
「手ぬるいですわ。やるなら身も心も差し出して離れないようにしなければ」
男爵夫人の愚痴を皮切りに、男爵家の者はわたしが心を掴んだやんごとなき方々についての話題で盛り上がった。わたしは適当な相槌に終始し、何か問われたら無難に答える。
当然、攻略対象者達はこんな人達に話題を提供するような下手を打つ方々じゃない。けれど前世を思い出してこれまでの自身の所業を振り返ると、わたしもこの人達のことは言えないじゃないか。
……何が恋愛だ。成り上がるために恋心を利用して惑わせただけだろう。

「ところで明日は誰を付き添いにする予定なんだ？」
「付き添い……ああ、入場の際にですか？」
「普通なら婚約者と共に、だったかな。婚約者がいなければ家族や仲が良い友人が通例となっておるだろう」
明日の催しは男爵が言う通り、親しい異性と共に入場することになっている。『どきエデ２』だと攻略に成功したキャラがヒロインの相手を務める。逆ハーレムルートだと最も好感度が高いキャラになる仕様なんだけれど、大抵は好感度調整のため王太子になる。
「勿論、旦那様のお相手はこのわたくしでしたわ。貴女のお相手は当然王太子殿下ですわよね？」
……そう言えば、その件についてさっき話すの忘れてた。
『どきエデ２』だと会場に向かう際に突然、攻略した相手に自分と共に行こうって誘われるから、今の段階ではそんなこと頭の片隅にもなかった。
とはいえ、もし付き添いの件を覚えていても、ただでさえ誘いを断ってご機嫌斜めになってたカルロス様に切り出す勇気はなかった、とも思う。
「ううん。まだ誘われてませんから、他の誰かと一緒に、って考えています」

「そうか。確かに婚約を解消していない状態で別の女性と連れ立つのは体裁が悪いからな。王太子殿下の後ろ盾があるとはいえ、他の貴族を敵に回したくはない」
「なんて弱気な！　自分こそが王太子殿下の伴侶だ、と強く主張するべきでしょう！　アンヘラ、明日は早いうちに自分から誘いなさい」
「待て待て待て、男爵家の立場も考えてくれ！　そんな大胆な真似が許されるか！」
それにしても、男爵はわたしを男爵家に迎え入れた時は強引にすり寄れって頻繁に言ってたくせに、今や慎重になっていた。逆に男爵夫人の方が積極的に関係を進展させろってうるさいぐらいだ。
男爵は貧弱な男爵家の保身を。男爵夫人は社交界での見栄を。
二人は自分のことをそれぞれ気にしているんだろう、と勝手に推察した。
「んん、それじゃあ儂の出番か？」
「仕方がないなあ、義兄であるこの俺が面倒を見てやろう」
「それより宰相閣下のご嫡男様とも親しかったわよね。それとも公爵閣下のご子息がいいかしら？」
「あ、いえ、その……」
男爵や義兄は論外。彼らに手を取られるなんて想像しただけでもおぞましい。

カルロス様以外の攻略対象者を選べばカルロス様からの印象を悪くできるけれど、代わりにその攻略対象者からの好意が更に深まる可能性が拭えなかった。
でも逆ハーレムルートを完遂するためにこの一年を費やしたせいで、攻略対象者以外の男子とはあまり接点がない。彼らにしても、王太子たるカルロス様を敵に回す懸念があっては快諾してくれないでしょうね。
「わたし、エドガーと一緒に行こうって思ってます」
だから、わたしの口からは彼の名が自然と出ていた。
当然のことながら男爵夫妻は驚いたようだ。
部屋の片隅で控えているエドガーは一体どんな顔をしているのかしらね？
「確か最も信頼する従者でも良かったんですよね？」
「う、うむ。確かにそうした例は少なからずあったと記憶しているが……」
「駄目に決まっていますわ！　学院卒業の晴れ舞台で選ぶ相手はとても重要ですの。従者なんて婚約者もおらず家からも冷遇されている者が取る最終手段！　そんな真似をアンヘラにさせたら末代までの恥ですわ！」
男爵夫人が憤るのはわたしを案じてなんかじゃなく、男爵家や自分の見栄のためだ。これまでだって、学院に通い出した頃は連日どのお方と親しくなったかを報告させられ

たし、カルロス様に話しかけられた日は初めて彼女から褒められたものだ。
「しかし、聞けば宰相閣下のご嫡男様方も王太子殿下と同じく、まだお相手と婚約関係を結んだままだそうじゃないか。なのにアンヘラの手を取って来場したら不貞と見なされかねん」
「だからこそです！　こんなにも仲睦まじいんだと誇示するいい機会でしょう！」
「博打がすぎる！　男爵家など吹けば消し飛ぶ程度の立場なのだから、慎重に事を運ばねば……！」
「それを臆病と言うんですわ！　わたくし、貴方様のそんな弱腰が前から嫌いですの」
夫婦喧嘩が始まってしまった。とは言っても今日に限ってのことじゃない。
わたしの扱いを巡って意見が割れているためか、このところうんざりするぐらい頻繁に衝突しているような気がする。それほど自分達にとってもわたしの行く末は重要なんでしょう。
「わたしはお父様の意見に賛成です。許される立場にならないとどこから何を言われるか分かったものじゃありません」
「そんなの嫁ぎ先の権力で黙らせればいいだけでしょう！」
「それが皆様に通用するんですか？　成り上がりが頭ごなしに言って皆さん大人しくし

てくれる、と」
「うぐっ、そ、それは……」
男爵夫人はわたしが述べた可能性を否定できなかった。
表立って逆らわなくても、裏で手を回して害をなすのは貴族の常套手段。そしてうちは男爵家にすぎない。
「お父様の仰る通り、明日までは我慢すべきです」
「……しょうがないわね」
男爵夫人も折れたらしく、眉間にシワを寄せながら深いため息を漏らした。
「けれど、どうして旦那様ではなくエドガーなのよ？」
「男爵家に来てからずっとわたしの世話をしてくれましたから、彼にわたしの晴れ姿を見てもらいたいんです」
「……っ」
どうやら男爵夫人も短くない間わたしを虐げていた自覚があるようだ。男爵家で唯一わたしの支えになってくれたのがエドガーだったと告げられても何も言い返せないでいる。
わたしはその反応から両親を論破できたと確信した。

立ち読みサンプルはここまで